

「いいか、耳の穴かっぼじくつてよく聞け。そもそもあの娘との馴れ初めは……」

「何が『馴れ初め』だつてんだ。まだ付き合うほどもいってなかつただろうが。上陸して半日だぞ。その短い時間に出会つて知り合つて気持ちが通じあつたなんてアリエネエ」
「るせ！ あれからそうなる予定だつたんだよ！ ああ、麗しのデイズ！ちゃん。キユートな金茶の髪にエメラルド色の瞳がすくく映えて、そばかすさえも笑顔を引き立ててた！ ああ、笑顔はまるで爆弾のようだった！キミとの出会いはまるで雷に遭つたようだったよ！ このアホ剣士が邪魔しえしなげれば、あのままキミの手を取つて、一目散に教会へ飛びこんでしまひたかつた……」

「雷に打たれたとき、心臓が止まつていればよかつたんだ。そしたら教会で牧師に祝福でなくて弔いの祈りを捧げられていただろに」

「……本当に心臓が止まつたのかも知れネエ。どきどきして頭に血が上つて耳元で鐘が鳴る音が聞こえた……」

「おい、ドクター。ここに不整脈で高血圧で、おまけに幻聴の患者がいるぞ。そつちやお前かなり出血多量なんじゃねえ？ その状態で血圧が高くなるはずねえだろ。自覚症状がねえのが不思議だな」

「ミドリムシに言われるのは心外だ。そちらさんこそ、耳だの腕だの取れかけてるように見えるんですがねえ。まあ耳より三半規管が生まれつき欠け落ちているんじゃありませんかね。俺がああ娘とさあこれかあ愛の逃避行で教会へ行こうと固く将来を誓ひ合つていたときに、海軍の群れを率いて現れやがって！」

「……愛の逃避行で教会行きて何かおかしんじやねえか。普通、祝福されねえから逃避行つてするモンだろ？」

「突つ込むトコはそこよ！ つか、何であんなトコに海軍引き連れてやつてくんだつてするんだよ！ それも黙つて行きすぎれば何の関係もねえただの他人でいられたのに、『お、コック、今日の晩飯は？』つて巻き込んでんじやねえこのボケ！ 百歩譲つて声掛けをの良しとしてもそれは『助けてください』だろ！ 追われ

てる最中に晩飯のリクエストなんかするかフツ！」

「あ……」
「あー、じゃねえ！ ついでに言えば、いー、も、うー、も全て却下だ！」

「……昼飯を食いはくつちまって、腹減つてたんだよ。で、お前見たらついで」
「ついで、じゃねえ！ つまりはナニか？ 俺は梅干しめたら唾液、ついでう条件反射のアイテムか？ 俺の顔が食いモンに見えるのかテメエは！」
「見えねえな」

「そうだろう見えねえだろ。俺はレディをエスコートすることに至上の喜びを見いだす恋の下僕だつて」

「この間はプリンスとか言つてなかつたか？ 身分がたぐさんあつて忙しいなあオイ」

「なあオイ、もしかしららいつかなるかもなメイビーダイケンゴ！ 例えつて言葉を知らねえのか、知らないなら辞書引いて憶えておけ。大辞林グランドライオン版第四十四版がライブラリにあるから出航までに四百三十四ページをめぐつておけよ」

「ほんつとよく口が回るよなあ、お前。でその下僕でプリンス様の邪魔を俺がしてしまつたからお前は怒つてるんだろ？」

「ちげええええええええ！ 何度言つたらわかるんだよ！ お前みたいな下等緑藻類がいくら邪魔しようが、俺とデイズちゃん仲にヒビひらつて入る苦ねえだろ！ 俺が我慢ならねえのはだな、その後で海軍が銃で狙ひをつけた時、射線にためえが飛び込んできたことだ！ 俺を庇うなんて真似はそれこそ百万年早えんだよ、このボケ！」

「でもあの時テメエはあの子を抱き上げて」

「当たり前だ、レディには真つ先に安全な場所に避難してもらわねえと」

「しかし女一人抱えて銃の火線を逃れられるほど回復してねえだろ、テメエの腰」

「ほー、つまりはテメエは俺様の腰の状態を慮つてくださったワケね。お優しくなるわ。それくらい気が回るなら、最初からあんなに乱暴に何度も何度も揺さぶつたり表裏ひっくり返したり好き放題するんじやねえ！」

「お前の方だつて合わせて腰振つてたろが！ そもそも、お前は一度も止めるとか嫌だなんて言つたことね

えだろ！」

「そりや言う苦ねえだろ！

頭まつ白になつて目の前にお星様がチカチカ輝いて天国まであと一歩と瞬に、途中で止められてたまるか！」

「へえ、つまりお前は俺のことを乱暴だのテク無しの言いながらそれに満足してるわけかい？」

「満足だあ言ひなげだな！ 入れて突くだけの単調作業しか出来ねえテメエの為に俺の方が工夫と技術とでカバーしてやつてるんだ！ いい

か！ セックスはでかいだけ体力だけじゃあ絶対満足まで持つていくことはできねえんだぞ！」

「言いやがったな！ いつも俺のかさにヒイヒイ言つてるくせに！」

「ハ！ 俺の方こそテメエを何度も何度もイカせてやるだろうが！」

「よし、じゃあどつちが相手を多くイカせられるか勝負」だ！」

「おおよ、動けなくなるか降参と言つたらその時点でソイツの負けで終了つてことでいいな？」

「承知した。じゃあー！」

二人ともがぱりと身を起し、身につけているものを取り去ろうとした、が。

「あ痛つっ！ つてつっ！」

二人とも頭を抱えてまたその身体を白いシーツの上に横たえる。

二人ともシャツの類は着ていなかった。その身体の上を覆うのは真つ白い包帯で、ところどころ赤いモノが滲んでいく。

「ふたりともいい加減にしろよな！ いくら何でも動ける状態じゃあねえだろ！ 絶対安静！ 起き上がるのも禁止！」

「なあ、チョップバー、でもじゃあ寝ながら少し運動するつてのは……？」
ぎろり、と高みから冷たい目で見下ろして、低い声で船医は厳かに宣言した。

「特にセックスは厳禁、医者の方を破つた人間は……」

「破つたら……？」さすがにバツがわるそうに上目づかいで聞くと、

「二度とセックスなんてできないように手術してあげるよ、陰茎と陰囊のどつちがいい？」

につこり笑つた白衣に、海軍より何よりも恐ろしいものがあると二人は内心で同時に頷いた。